

JMLA 第20回医学図書館員基礎研修会 参加記

中村さやか

日時：2013年8月26日（月）～28日（水）

場所：千葉大学アカデミック・リンク・センター
プログラム：

1. グループ討議：これからの図書館員
2. 講演：これからの図書館員
千葉大学附属図書館長
アカデミック・リンク・センター長
文学部教授 竹内 比呂也 氏
3. アカデミック・リンク・センター見学
4. 講義1：ヘルスリテラシー
山口 直比古 氏
5. 講義2：レファレンス1
演習1：レファレンス2
杏林大学医学図書館
諏訪部 直子 氏、笹谷 裕子 氏
6. 演習2：情報検索1 医中誌 Web
演習3：情報検索2 PubMed
防衛医科大学校図書館 関根 志保 氏
東京慈恵会医科大学学術情報センター
大崎 泉 氏
7. 講義3：蔵書管理
東京厚生年金病院図書室 山田 有希子 氏
8. 講義4：電子リソース
東邦大学佐倉病院図書室 黛 崇仁 氏
9. 講義5：日本医学図書館協会（JMLA）の意義と活動

参加者数：75名

1. グループ討議：これからの図書館員

テーマ「これからの医学図書館員」について3日間かけてグループ討議を行いました。

11に分かれたグループごとにテーマを決め、2012年に始動したアカデミック・リンク・センターの新設備を利用しながら、グループ・テーマを実現するための課題や方策を話し合い、他グループとのクロストーク、各グループでの再度の話し合いをして、最終日に発表と意見交換を行いました。

この度の研修会は、医学図書館員・病院図書館員以外に、国会図書館員・公共図書館員・前職医学関係図書館員と、さまざまな館種の図書館員が参加されていました。

文部科学省がまとめた“これからの図書館像”の「館種を越えた連携など多面的なネットワークの構築の必要性」を特に意識させられるグループ討議が連日続けられ、各図書館員から図書館の現状を聞くことができました。具体的には、予算の削減や人員削減、図書館間の連携の必要性、利用者・地域のニーズを知り応えるにはどのようにしていくかがあげられました。

マスコミやインターネットにより、健康に関する情報があふれています。WHOは1986年以降の数度の健康作り国際会議を通して、健康情報リテラシーの重要性を提唱してきました。患者・市民の側にも情報を読み解く力が求められ、公共図書館でも健康情報リテラシーが求められています。

図書館員は、利用者のニーズを把握し常にアンテナを張り巡らせ情報を取得しスキルアッ

プしていく必要があることをどの館の方も感じており、私自身も講義を受けその必要性を強く感じました。

2. 講演：これからの図書館員

米国の大学ではライブラリアンという職業は絶滅しようとしているそうです。インターネットでのレファレンスサービスも広まっており、利用者は図書館まで足を運ぶ必要がないのです。日本では当分の間はライブラリアンの活躍の場はあるそうですが、大学では図書館は巨大書庫という不良債権になりかねない状態のようです。

竹内先生の講演は、主にこれからの厳しい環境に取り巻かれている大学図書館員について文部科学省の方針を基に、どのようにあるべきかどうしていくべきかという内容でした。

3. アカデミック・リンク・センター見学

この場で学ぶ学生たちは、どのような能力を

身に付けて卒業していくのか楽しみになるような、驚きのある施設見学でした。

4. 講義1：ヘルスリテラシー（健康情報リテラシー）

マスコミやインターネットには健康に関する情報があふれています。この講義では、それらを評価して受け入れることの重要性を紹介されました。

(1) 健康情報リテラシー能力について

WHOが1970年代以降患者の知る権利を提唱し、インフォームド・コンセントの考え方は広く定着しています。インフォームド・コンセントを保障するためには、患者・市民の側にも情報を読み解く力が求められることとなります。医学情報や医療にかかわる情報を主たる情報媒体として扱っている医学図書館員にとっては、自ら健康情報リテラシーを身に付けることで利用者サービスの向上が期待できるばかりではな



【写真1】 アカデミック・リンクセンター 外観



【写真2】 ブックツリー



【写真3】 電動書庫



【写真4】 グループワーク エリア



【写真5】 グループワーク ルーム壁面



【写真6】 研究個室



【写真7】 プレゼンテーションスペース



【写真8】 フリースペース



【写真9】 カウンター

図1 主な見学場所

く、消費者健康情報提供の主体としての役割に積極的に取り組むことも求められています。患者や市民のための健康情報リテラシーの学習支援は、医学図書館員の重要な役割の一つであると考えられます。

(2) 背景としての健康への関心の高まり

歴史的には、WHO の提唱、消費者運動としての患者の権利、インフォームド・コンセントの定着から患者の自己決定へと移りました。

政策的には、2000 年に米国の Healthy People、2000 年の健康日本 21 や、2007 年の医療法第 5 次改訂での医療機能情報提供制度などがありました。

これらの背景から図書館界は、健康情報提供機関を設置し、情報リテラシー教育 (Internet の利用法など) につとめ、わかりやすい情報の作成と提供を心がけ、情報のアウトリーチ、既存の情報提供機関の充実や公開、健康情報提供のための専門家の育成、医療関係者との連携を推進してきました。

(3) 健康情報の量と質

マスメディア情報が健康に与える影響は大きく、おもしろく伝える役割を担っており、その有用性は専門家も認めています。ただし、放送で発言される情報は一過性という性格が強く、受け手は受動的であり、偶然情報を得ることも多い状況です。ちまたにあふれるこのようなマスメディアの健康情報を補完すべく、信頼性が高く、わかりやすい情報を提供するシステムを整備構築していくことが必要であるということです。

情報検索といえば、「検索エンジンを利用してインターネットにある情報を調べること」と一般には認識されています。文献データベースを使う情報検索は、その一部分です。各検索ツールの特徴をよく理解して使い分けることが必要です。得られた情報をそのまま真に受けるのではなく、情報を評価できなければなりません。

(4) 健康情報の評価

情報の評価は次のステップで行います。

i) その情報は正しいか。

ii) その情報は自分の問題解決に適切か。

iii) 情報を別の方法で確認できるか。

例えば、Wikipedia は使えるかを考えてみます。

Wikipedia はどの程度正確か? 2007 年 Nature 誌の調査によると、科学分野 42 項目について記載されている事項の正確さについて調査した結果、調査対象項目の間違い数において Wikipedia はブリタニカより 32% 多かったと出ています。その一方で、Wikipedia をより良く使うべきであるとの考えもあります。2009 年 7 月米国国立衛生研究所は、Wikipedia 上の保健医療情報の拡充と信頼性の向上を図るため、運営する非営利団体 Wikipedia Foundation と協力関係を結んだと報じられました。

使い次第で Wikipedia は有用な情報源になります。また鵜呑みにせず、他の情報源で確認しましょう。編集の履歴を見ることができるので、場合によってはこの履歴を確認するとよいです。Wikipedia は、ある質問事項の予備的な調査に使う程度にとどめるのがのぞましいのではないのでしょうか。

(5) 情報リテラシーとは (復習)

i) 情報が必要となる時期を知っている。

ii) 問題解決にどんな情報が必要か分かる。

iii) 必要な情報を見つけられる。

iv) 問題を効果的に処理する情報をすぐに評価してまとめることができる。

v) 他の人に適切に情報を伝えられる。

vi) インターネットなどの健康情報を評価できる。

5. 講義 2、演習 1: レファレンス 1、2

レファレンスサービス概論では、定義や意義、傾向と業務区分と内容、業務プロセスなどを学びました。自館の環境・サービスを熟知していることが必須要件と思われました。またレファレンスの記録をとることも重要です。

医学図書館のレファレンスでは、その動向

(EBM や市民への情報提供) や特徴 (文献数が多い、至急、生命にかかわる) が説明されました。また、原点に帰ることも重要で、ランガタンの「図書館学の5原則」やレファレンスの心がまえ(「帰らせません、てぶらでは」「節約します、あなたの時間」が肝)を知り、そのために常のブラッシュアップが必要とわかりました。

レファレンスに必要な基礎知識やチェックポイントも教えていただき、インタビューが大事であること、一歩踏み込んだインタビューをする(質問の背景や利用目的などをたずねる)ことで利用者が本当に求めているものがわかり、対応が大きく変わることがわかりました。

6. 演習 2、3: 情報検索 医中誌 Web、PubMed

事前課題について先生の解説に従って実際にパソコンを操作しました。PubMed の詳しい操作方法は「病院図書館」31 巻 4 号をご覧ください。医中誌 Web・PubMed の基本検索手順は練習しておくとう便利です。検索においてシソーラスを知ることは重要です。

7. 講義 3: 蔵書管理

図書や雑誌の管理方法について、収集・提供・目録・分類・配架・蔵書評価・選書・発注・受入・点検・除籍などを詳しく説明してい

ただきました。

8. 講義 4: 電子リソース

電子リソースとは、電子ジャーナル、電子ブック、オープンアクセスと機関リポジトリのことです。これら電子リソースの利用と管理について説明していただきました。電子ジャーナルとプリント版の利用者と図書館員にとってのメリット・デメリットやオープンアクセスの背景と実現方法、機関リポジトリの仕組みとメリットがわかりました。

また、利用者のためのアクセスルート(データベースからフルテキストへのリンク)の整備・管理システム・利用統計の取得方法についても説明していただきました。

9. 感想

医学図書館員基礎研修会に参加するにあたり、私は初めてビジネスホテルという施設を利用しました。不慣れで緊張していましたが、周りの方々は図書館員ですので柔軟にお話しできる方ばかりでした。主催者の心配りもあり、少し安心して臨むことができました。

図書館を取り巻く環境は厳しい現状であることと取り組む業務の責任の重さを感じた、充実した内容の3日間でした。